

「留学生センターにおける地域主導型プログラム」の始動への方策とこれから

The Program of International Student Center Led by The Community--- The First Trial and the Future

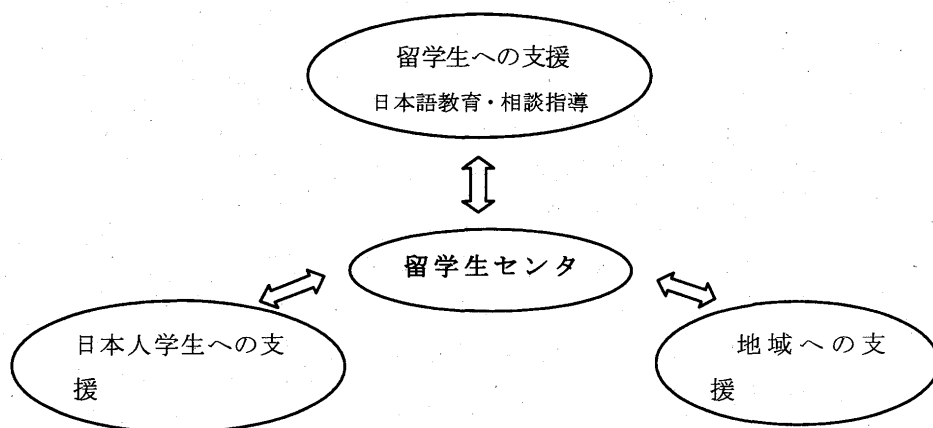
大石 寧子

Abstract : We have had one of the policies that is a good coordination with the community of Tokushima University since “International Student Center (hereinafter referred to as “Center”) ” was established. Since then we have appealed three aspects to the community. Those are the enlightenment of internationalization, the measures of cross-culture communication and the symbiosis and the co-activity. We, staff of Center, had managed and organized “Nihon-go Salon”, but this year the local volunteer groups started to do so instead of us. Over the past 3 years the parties at “Nihon-go Salon” had been also managed by us, and the community had joined the events, but this year the local volunteer groups started to manage and organize the parties with their own connections and know-how, and we support them. I would like to consider the past and the future of Center.

1. はじめに

徳島大学に留学生センターが設置され、始動した平成 15 年から、留学生センター（以下センターとする）では、センターの方針の一つに「地域との連携」を掲げてきた。地域との連携には、地域の①国際化への啓発②異文化理解への手立て③共生・協働の 3 つの視点が必要と考え、今日に至るまで地域に対しこれらの視点からの働きかけを行ってきた。

[図 1]



昨年 3 月にセンターが移転したことを契機に、地域ボランティアからなる JSS (Japanese Speaking Salon) が誕生し、昨年夏より留学生と地域や日本人学生との「国際交流サロン」が月一回運営されている。この企画運営を JSS が行い、センターはその支援をするというセンタ

ーが目指してきた地域主導型のプログラムがここに発足した。ここに至るまでのセンターの方策や問題点とこれからについて考察したい。

2 地域に対する方策

2. 1 センター設置当時の状況

センター設置時の徳島でのボランティア活動は、徳島県、徳島市のほかに国際協力に関心のある市町村が行っている国際交流協会や、同好の士によるボランティアグループが数グループという状態でありセンターが主催する催し物や日本語教育関係の事柄への参加者は、これらの機関のどこかに属している人達が殆どであった。皆一様に熱意があり、親切に満ち溢れていたが、ともすれば「日本人－教える人、与える人」「留学生－習う人、困っている人」という見方で、同じ場を共有し共に学びあうという共生の姿ではなかった。日本語教室でも新庄(2006)がいう「日本語を通して互いを学びあう『共生日本語』を協働が支える」という状況ではなかった。地域との連携をより深く、真の連携にするために留学生をはじめとする異文化への接触・理解に関して地域の人々にどのような場を提供したらいいのか、どのような方向を示唆したらいいのかセンターの課題となった。

2. 2 地域に対する方策

遅くに設置された留学生センターはたぶん皆同じような状況が予想されるが、センターが設置される前からそれぞれのボランティアグループは、活動を開始していて、それなりの実績や歴史や地域に対してのポジションを持っていた。後発のセンターとしては、地域の人達の共生・協働への「気づき」となる機会を少しでも多く提供するというスタンスをとることにして、共生・協働の全体像を見せつつ、個々の知識や個々のスキルの向上を目指し、次のような方策をとった。①異文化理解に関しての地域対象のクラス開講②日本語教育についての理解と取り組み方③留学生との協働の場の提供④県外からの少しでも多くの新しい風(講演・勉強会等)の取り込み⑤地域による日本語教育を盛り込んだプログラムの実施⑥公的な場でのその発表などであった。特に的を絞ることはせず、不特定多数を相手に展開していくことにした。そして地域の人々に留学生をはじめとする外国人と同じ立場に立っていいコミュニケーションをとる、すなわち共生・協働に一人でも多くの気づきを促すことができたらと考えた。そのための方策の流れは以下のようなものである。

[地域に対する方策の流れ]

H15. 10	公開講座開講(大学開放実施センター)	
	地域サポーター募集	
H16. 11~H17. 3	ボランティア日本語教師養成講座開講	
H17. 5	「日本語サロン(日本語で話そう)」開始(常三島・蔵本)	
H17. 7	地域によるサマープログラムへの受け入れ支援	
H17. 9	学会発表	
H18. 3	「JSS」グループ発足	
H18. 8	「国際交流サロン」始動	*この間講演会や勉強会を随時開催

それぞれの方策に関しては、以下のようなものである。

3 方策

3. 1 公開講座

徳島大学には地域生涯学習ニーズに応えるために設置された「大学開放実践センター」があり、様々な講座が組まれている。センターは、ここに「国際交流ボランティア入門ー徳島に住む外国人を支援するとはー」を開講し、日本語教育・異文化理解・コミュニケーションをキーワードに毎年、土曜日（隔週）にセンター教員5名によるオムニバス講座を行っている。平成15年秋冬期より開始し、16～17年度は春夏期に行い、今年度は春夏期・秋冬期共に実施し、12月に第5期の講座が終了した。本講座は、指導や教育というよりも「気づき」を促すという視点を強くし、5名の教員が担当分野を通し、可能な限り留学生も取り込んで講座を展開させている。平成18年度秋冬期は以下のような内容であった。

- 1回目 オリエンテーション、文化・自己・コミュニケーション
- 2回目 現代留学生事情
- 3回目 アジアと日本語～100年前の日本語教育と朝鮮半島～
- 4回目 日本語教育と異文化理解
- 5回目 異文化とコミュニケーション

3. 2 地域サポーター

センターの日本語教育の方針は「使える日本語」で、4技能の運用に目を向けている。その日本語授業を支援する「サポーター制度」を平成15年5月に作り、まず徳島大学日本人学生からなる「学生サポーター」から始まった。「地域サポーター」は3.1の公開講座をきっかけに募集が開始された。活動は各日本語クラスの要請に応じ、例えば動詞の各フォームの変換練習、会話相手、スピーチ練習、タスク相手、調査相手等その内容に応じて学生・地域サポーターが支援をし、留学生と共に日本語教育を学ぶ。

今期の活動内容、活動回数、参加人数は、本紀要後半の「年報」中の3)サポーター制度を参照されたい。

3. 3 ボランティア日本語教員養成講座

平成16年度、徳島県主催で県下3箇所です「ボランティア日本語教師養成講座」が開かれ、そのうちの1つをセンターが請け負った。日本語教育担当教員3名が交代で11月から3月までの隔週土曜日にその地に出向いて、講義・模擬授業を実施した。自分の外国語教育(主に英語)経験を元に日本語教育を組み立てがちだが、そうではなく日本語教育が担うものや外国語としての日本語への取り組み方、運用につなげる授業等への視点や具体的手立てについての指導を行った。

4 「国際交流サロン」

4. 1 試行期間

2.2の[地域に対する方策の流れ]全てに係わった人達の中から自分たちで留学生センターのプログラムの運営を望む声が4年目の昨年3月にあがった。グループ名をJSS (Japanese Speaking Salon) とし、メンバー3人で従来センター教員が運営していた留学生と日本人が日本語で自由に話し合う「日本語サロン」をベースに、参加者が一体となって体験できる季節関連行事や留学生による発表などを時折盛り込もうという「国際交流サロン」を立ち上げた。その

回のテーマを糸口として地域の日本人・日本人学生・留学生が共に学びあうことを目標とした。そしてセンター教員を越える地域ならではのノウハウや人脈が活かされることとなった。例えば8月に行われた「日本語でおしゃべり、踊れへんで？（踊りませんか）」は、阿波踊りを控えた時期に実施され、踊りの指導者、貸し出し用浴衣の入手着付け、講義者・講義用ビデオ、当日の集客力と地域の力の強さが感じられる内容であった。また、踊りの練習が会のアイスブレイキング的な役割を果たし、その後の1対1のおしゃべりがとてもスムーズに行なわれ、地域・日本人学生・留学生からなる参加者にとって有意義な結果となった。試行期間である今年度は、日本人が上に立ち、その知識・情報を持ち合わせていない留学生に教えてあげるという視点ではなく、共にその内容に取り組む、一緒に同じところに立って経験するという協働の姿勢を維持することに努めた。毎回の開催時は、受付をはじめ司会、テーマの説明・講義、活動、日本語でのおしゃべり等全てJSSが進行・運営し、センターの教員は、会場の確保、当日のスムーズな運営を図るためのサポートにまわった。しかし下準備として適当な頻度でJSSと本プログラム担当教員は打ち合わせを重ねた。センター教員は、センターの日本語教育担当者3名が交代で当日の支援にあたった。今年度の実施内容・参加人数は以下のようである。

[平成 18 年度 国際交流サロン]

H9.2.28 現在

	実施日	内 容	参加人数 (地域・留学生)	備 考
1	H18. 8/5	日本語でおしゃべり、踊れへんで －阿波踊り－	36 名 (24・12)	
2	H18.9/2	日本語でしゃべれへんで －日本語でおしゃべり－	24 名 (13・11)	
3	H18.10/14	日本語でおしゃべり、書をしてみんで －書道－	29 名 (16・13)	ガレリア新蔵にて 「書道をしてみんで？」作品展 実施
4	H18.11/3	「多文化交流」	－ (11・－)	徳大祭・留学生センター交流会に合流
5	H18.12/16	留学生との触れ合い体験－お茶会－	18 名 (12・6)	06 秋冬期公開講座修了者と合同で実施
6	H19.1/13	講演会「吉野川と遊ぶ」	61 名 (47・14)	「日本事情Ⅳ」 (全学共通教育センター) と共催
7	H19.2/10	日本の 2 月の行事を体験しよう －豆まきして日本語でしゃべれへんで－	36 名 (27*・8) *含. 小児	「中国高校生招聘事業」高校生 3 名も 参加 (受入: 市立高校)
8	H19.3/3	日本の 3 月の行事を体験しよう －桃の節句にお雛様を飾り 日本語でしゃべらんで－	－	

* 第 4 回は留学生センターの交流会（自由参加型）に合流、第 8 回は集計後の催しの理由により参加人数には含まず。

4. 2 参加者の声

国際交流サロンとして独自で企画運営したものは、上記の表からわかるように5回であった。その中よりアンケート調査を実施した第1回（阿波踊り）第3回（書道）第7回（節分）をまとめた結果は以下のようである。

第1回（阿波踊り）	参加 21 名中 17 枚回収	
第3回（書道）	29 名中 15 枚回収	
第7回（節分）	36 名中 18 枚回収	総枚数 50 枚

[アンケート集計結果]

留学生・・・☐ 日本

人 ……無印

1 このイベントをどのようにして知りましたか。

a ポスター	b 知人・友人	c 先生	d その他
<input type="checkbox"/> 10 2	<input type="checkbox"/> 3 7	<input type="checkbox"/> 12 12	<input type="checkbox"/> 1 6

2 今日のイベントは、どうでしたか。

a とてもよかった	b よかった	c あまりよくなかった	d よくなかった
<input type="checkbox"/> 25 17	<input type="checkbox"/> 2 9	<input type="checkbox"/> 0 0	<input type="checkbox"/> 0 0

3 それはどうしてですか。

- ・いくつかを抽出
- ・原文のまま

留学生

- ① 日本人は、おもしろい。はなすは、いいれんしゅとおもいます。
- ② いろいろなおもしろいことについておしゃべりしました。そしておしゃべりした人はともだちのようになります。
- ③ ひさびさにしよどうをやってしんせんな気持ちでした。そして○子さんがいろいろアドバイスして下さったりいろいろ話しあったりとても楽しい時間でした。
- ④ Amazing !
- ⑤ とても楽しいです。みんなと一緒に豆まきをしたりたべ物を食べたりしました。おもしろいです。色々なことをしました。
- ⑥ 子どもがたくさん来てとてもおもしろかったと思います。そして日本の節分と言うことをわかるようになりました。先生たちもよく準備しておいてほんとうにどうもありがとうございました。

日本人

- ① なかなか外国の方々とふれあえる機会が少ないためいい機会になった。
- ② 今回のような催しに参加する機会がほとんどなく初めての参加だったこともあるけれど留学生の人達と同じ体験を通して会話をしたり理解を深められたのが良かったです。
- ③ とても良かったです。おとなりの方とも親しくできてとても良かったです。書道の楽しみ

も再発見しました。

④ 日本文化を自体を再認識できた。

⑤ 久しぶりに節分の行事をして楽しかったし留学生の人と話せたので楽しかったです。また子どもさんがいることでとても明るい雰囲気になったので良かったです。

4 これからどんなことをやってみたいですか。 (複数回答あり)

留学生

- | | | |
|-------------|----|---------------------|
| ① 料理 | 5名 | 日本の料理、なべやき、手巻き寿司 |
| ② 日本の行事 | 4名 | ひなまつり 3名
なんでも 1名 |
| ③ 日本の歌 | 1名 | |
| ④ 書道 (ひらがな) | 1名 | |
| ⑤ 遊び | 1名 | |
| ⑥ 剣道 | | |
| ⑦ 何でもいい | 4名 | |

日本人

- | | | |
|----------|----|----------------------------|
| ① 行事 | 5名 | 餅つき、ひなまつり、花見、七夕、季節の行事とその説明 |
| ② 料理 | 4名 | いろいろな国の料理、 |
| ③ 文化的なこと | 4名 | 書道 華道 お茶会 難しくなく簡単に取り組めるもの |
| ④ パーティ | 3名 | バーベキュー、花見、クリスマス |
| ⑤ スポーツ | 2名 | |
| ⑥ 陶芸 | 1名 | |

5 どんなことについて話したいですか。

留学生

- | | |
|------------------------|----|
| ① 日本の文化 (含. 食文化) | 5名 |
| ② 何でも知りたい、いろいろなことを話したい | 4名 |
| ③ 日本の武道 | 1名 |
| ④ 自国の料理 | 1名 |
| ⑤ 日本人のライフスタイル | 1名 |

日本人

- | | | |
|-----------------------|--------------------------|----|
| ① 留学生の国 | 料理、観光地、習慣、日本人をどう思っているか 等 | 6名 |
| ② 文化 (留学生の国の文化、日本の文化) | | 8名 |
| ③ 留学生の日本での生活 | | 1名 |
| ④ 何でもいい。色々話したい。 | | 3名 |

6 その他 (感想、提案、質問 等)

留学生

- | |
|-------------------------|
| ① めっちゃ楽しかったです。またやりたいです。 |
| ② 時間が短かった |

- ③ こんなちいきじゅうみんとのこうりゅうのきかいがたくさんあったらいいですね。

日本人

- ① 地域の人と留学生が交流できることも素晴らしいですが、季節行事の由来などもわかり子どもにとっても、私にとっても良い機会になりました。
- ② 時間が短かった。
- ③ 各国語は無理でも日本語⇄英語ぐらいでの説明が必要では？

4. 3 試行期間から得たもの

走りはじめた地域による「国際交流サロン（以下サロンとする）」であるが、期待されるものは大きい。試行期間の今年度を振り返ると上記のような様々な声がきかれる。この他に各回のサロンの開催にあたって感じたこともいくつかあった。

アンケート結果によると実施希望内容中多かったものは、料理であるがこれはセンター内にその設備がないので、いつか学外に出て実施したい。また日本人側では留学生の国についてや文化の違いについての興味や関心が高かった。今期試行した行事関係の他にこれらの要望も受け入れていきたいと考えている。これもまた来期の課題となろう。

毎回のサロンでは、説明や指示に関して、ベースはあくまでも日本語という方針のため、日本語で今期は行なってきたが日本語力がほとんどない留学生の参加が時折みられたので、来期は対応を考えて行きたい。例えば留学生による通訳とか、説明時にオーディオビジュアルをより取り入れたり、使用する日本語の難易度を下げたり言い回しを工夫するなど説明時のテクニックの検討などである。

広報に関しても工夫の必要を感じた。参加してみれば、留学生も日本人も楽しんでいい体験をするのだが、ポスターやセンターのホームページ等を見て参加する人は少ない。クラスの教員や JSS のメンバーが一人一人に声をかけ内容の説明を詳しくしてはじめて参加の運びになるケースが多い。

試行期間の今年度は、2～3週間前にポスター・チラシを作り、地域には JSS から主にメールで宣伝し、留学生・日本人学生にはクラスで教員より口頭で行なった。学内では蔵本キャンパスと常三島キャンパスの各所の掲示板や留学生支援室にチラシの掲示を行い、各クラスの教員は口頭で、またセンターのホームページ上に掲載などの情宣方法をとった。声をかければ参加するが、自発的な参加が少ない。土地柄なのか情宣方法の問題か情宣活動と集客率とのバランスを考えると今後大いに検討の余地があると思われる。

また地域参加者の参加の仕方であるが、試行期間ということもあり今年度は仕方がないと思われるが、全てお膳立てが整ったところへのお客様のような形での参加であった。2 年目となる来期は、次へのステップということで参加者の受身ではない能動的参加を目指したい。そのためには企画・運営方法に更に工夫が必要であろう。

5 おわりに

この地域主導型プログラムは、地域連携の具体的な形の 1 つであるうえに、そのノウハウや人脈がもたらす効果も大きい。また当初の「教える人、与える人」から一步踏み出した「地域」は、独立法人になり、経費節減の方向にむかっている留学生センターの教育の一部が担えるものとしての可能性も今後大いに期待される。

参考文献：

J.V.ネストプニ(1995)「新しい日本語教育のために」大修館書店

西口光一 (1999)「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」

『日本語教育』100号 7-18

新庄あいみ (2006)「多言語・多文化社会における地域のボランティア日本語教室をめざしてー
接触場面にみるインターアクションの観点からー」『大阪大学留学生センター
ー研究論文集多文化社会と留学生交流』第10号 43-48

岡 益巳 (2006)「留学生支援ボランティアの役割と現状」『岡山大学留学生センター紀要』
第16号 63-77

付記

本稿は、2006年9月に「日本語教育方法研究会」で発表したものに9月以降の活動部分を加筆し、1年間を総合的に見て考察を重ねた。